

7.高知医療センター・高知県立大学包括的連携事業：看護・社会福祉連携事業

1) 看護・社会福祉連携事業について

高知医療センターと高知県立大学は、医療・健康・福祉・栄養分野における交流連携を推進し、双方の実践、教育、研究の質向上を図るとともに、地域・社会への貢献を促進するため、平成 22 年 11 月に両組織間の包括的連携協定を締結した。これは、高知医療センター看護局と本学看護学部が、よりよい看護の実現を目指して平成 18 年から取り組んできた看護連携型ユニフィケーション事業を発展させたものである。現在はこの協定に基づき、全体を統括する包括的連携協議会の下に、健康長寿・地域医療連携部会、看護・社会福祉連携部会、健康栄養連携部会、災害対策連携部会の 4 部会を設置し、さまざまな連携事業を展開している。

このうち看護・社会福祉連携部会では、看護および社会福祉に関する連携事業として、①学生の臨地実習・教員の臨床研修における場の提供、②基礎教育・継続教育・大学院教育における相互協力、③教員によるコンサルテーションの実施、④臨床実践能力（知識・技術・態度）及び実践モデル等の開発・検証に関する共同研究、⑤県民・市民の健康づくりに資する活動の共同開催、⑥その他看護・社会福祉連携活動の実施、を行っている。

(1) 看護・社会福祉連携部会の委員および活動状況

令和 6 年度は部会委員を、高知医療センター18 名（看護局 8 名、地域連携室 10 名）、高知県立大学 9 名（看護学部 7 名、社会福祉学部 2 名）、計 27 名で構成し、活動を推進した。今年度は本学看護学部が部会長および事務局を務めた。

看護・社会福祉連携部会では、前年度末に活動計画が決定していたため、下記のとおり 1 回のメール会議と 1 回の部会会議を開催した。また適宜、情報交換や相談を行いながら、事業を進めた。

・第 1 回看護・社会福祉連携部会（メール会議）：8 月

上半期の事業実績および下半期の事業計画の確認、COVID-19 による影響の把握

・第 2 回看護・社会福祉連携部会：2 月 17 日開催

事業実績および活動評価の確認、次年度の活動に向けた課題の検討、次年度の事業計画の検討等

(2) 看護部会における事業実績

今年度は、活動に対する COVID-19 の直接的影響は概ねなくなったが、一部はオンラインで行うなど工夫し、両施設で協力して事業に取り組んだ。最終的な事業実績は表 1 のとおりである。

表 1 令和 4 年度看護部会における包括的連携事業実績

1. 学生の臨地実習・教員の臨床研修における場の提供

1) 学部生および大学院生の臨地実習

学部生：看護基盤実習、看護実践能力開発実習Ⅰ、急性期看護実習、慢性期看護実習、母性看護実習、小児看護実習、★チーム医療実習、総合看護実習（急性期看護・慢性期看護・小児看護・★精神看護・助産看護領域）、看護管理実習（急性期看護・慢性期看護・小児看護・助産看護領域）、助産看護実習Ⅰ・Ⅱ のべ 304 名

大学院生：小児看護学実践演習Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ、がん看護学実践演習Ⅰ、クリティカルケア看護学実践演習Ⅳ のべ 6 名

2) 大学院生および教員の臨床研修

大学院生：小児科医開催のカンファレンスへの参加（小児看護学領域、5回・のべ7名）、救急症例検討会等への参加（クリティカルケア看護学領域、2回・のべ2名）
教員：小児科医開催のカンファレンスへの参加（小児看護学領域5回・のべ7名）

2. 基礎教育・継続教育・大学院教育における相互協力

1)医療センターによる教育・研究支援

(1)教育支援

学部生：

インターンシップ（3回生31名）

実践的知識獲得へのサポート；「感染管理について」（2回生80名）、「医療安全について」（3回生85名）、「医学的知識を活用した看護実践」（3回生65名、4回生66名）

ゲストスピーカー；★治療と看護「患者・家族の移植治療のプロセスと移植コーディネータの役割について」（3回生10名）、急性期看護論「クリティカルケアの場における死と看取り」（2回生80名）、終末期看護援助論「終末期にある患者と家族のケアの実際」（3回生85名）、★チーム医療実習ゲストスピーカー「入退院支援センターにおける継続看護および連携について」（3回生85名）

★小児看護領域看護師1名の派遣（2024年10月1日～2025年2月28日）

看護実践能力開発実習Ⅰにおける指導（4回・4回生82名）

ナーシングカフェ：小児看護の魅力を語る会（2月20日・1回生1名、3回生2名、4回生4名）

*参加者なし：ドクターヘリ見学および「ドクターヘリの運用とフライトナースの役割について」

*未開講：がん看護論ゲストスピーカー「外来でがん治療を受けるがん患者への看護支援」

大学院生：★老人看護展開論Ⅱゲストスピーカー「高齢者のせん妄と薬物療法」（博士前期課程1名）

(2)研究支援

学部生：看護研究における研究対象者の紹介（助産コース）

大学院生：修士論文、博士論文における研究対象者の紹介（3題）

教員：教員の研究における研究対象者の紹介（4題）

2)大学による教育・研究支援

(1)継続教育支援

研修の講師：「ストレスマネジメント」（19名）、「グループマネジメント」（28名）、「話をきく技術」（12名）

シミュレーション研修「けいれんの初期対応」のトレーニングならびに勉強会；4Aフロア（小児看護学領域、1回・7名うち医療センター3名、2回・6名のうち医療センター2名）

マネジメントリフレクション（看護管理学領域、3回・118名）

シミュレーション教育学習会（オンラインでの学習会）看護実践能力を高めるための学習会「学習支援の極意を学ぶ！」（20名うち医療センター10名）

*未実施：「4・5年目看護師のキャリア開発」

(2)研究支援

看護研究4「看護研究を系統的に学ぶ」（5名）

3. 教員によるコンサルテーションの実施

CNS申請に向けてのサポート（小児看護学領域1名）

せん妄・認知症ケア、リエゾンチームのケアの質向上を目指すためのコンサルテーション(4 回 2 名) *未開催：QC サークル活動のコンサルテーション
4. 臨床実践能力（知識・技術・態度）及び実践モデル等の開発・検証に関する共同研究 なし
5. 県民・市民の健康づくりに資する活動の共同開催 1)市民を対象とする共同事業 *未開催：「赤ちゃん同窓会」企画・運営への学生・教員の参加 2)専門職者を対象とする共同事業 なし
6. その他看護・社会福祉連携活動 なし

★は新規事業

(3) 事業評価および次年度への課題

看護部会では、今年度も両施設で連携しながら各事業を実施した。COVID-19 の影響もほぼなくなり、計画していた事業は概ね予定通り実施できた。

年度末には部会会議において事業評価を行い、ここ数年の状況を踏まえ、本年度も実施してきた事業を再検討し次年度計画に反映することとなった。今年度、新カリキュラムに対応した実習（チーム医療実習）がスタートしたが、高知医療センターの協力を得て、学びの多い実習となっており、引き続き次年度以降も連携して実施する。これまでの事業を継続するだけでなく、各事業の効果や必要性を評価し、改善や発展に取り組み、両施設にとって有機的な連携事業を生み出すことができている。次年度は新カリキュラムに対応した実習として家族看護実習、総合看護実習Ⅰ、総合看護実習Ⅱ、看護実践能力開発実習Ⅱが開講される予定になっている。新規事業においては担当者間で連携を密にとり、高知医療センター、本学ともに実りの多い事業となるよう努める。

また、看護と社会福祉の連携強化として実施してきた、社会福祉部会で毎月（4～10 月）行われている事例検討会は、昨年度に引き続き対面での開催であり、本学からは看護の教員や大学院生も参加することができた。大学院生にとっては社会福祉やソーシャルワークについて学びを深める機会や、各専門領域における社会的課題に関して多角的に考察する機会となっている。また、社会福祉と看護の視点を織り交ぜ、対象者理解や関わりのプロセスを振り返ることで、複眼的な分析につながるだけでなく、互いの専門領域の考え方や活動を知ることが参加者にとって刺激になっていることから、今後も引き続き参加を促していきたい。次年度も対面のみで開催になるため、今後も参加促進を図っていく必要がある。

2) 高知医療センター・高知県立大学スキルズラボ

(1)高知医療センター・高知県立大学スキルズラボの相互利用の概要

高知医療センター2 階 205 に高知医療センタースキルズラボが開設されている。本学からは、医療センター看護局を通じて高知医療センターのイントラネット（院内 Web→設備予約）を使用して事前予約をおこなってから使用する（鍵は看護局、事務局で管理）ことになっており、主に学部生実習などの目的で使用している。高知医療センターの医師や看護師も事前予約の上、本学に設置している設備および備品（シミュレータなど）を使用できる。申込書類は教育研究戦略課に提出されるため、設備および備品の管理責任者は総務企画課から連絡があった場合、設置室、設備および備品を確保する。

(2)高知医療センタースキルズラボの利用実績

令和6年度(4-12月)における高知医療センタースキルズラボ使用実績としてナーシングスキルへのアクセス数は317(341)人、アクセス回数は8,353(10,197)回、映像閲覧回数は1,625(1,624)回、閲覧コンテンツ数は690(875)であった。動画講義へのアクセス数は105(88)人、アクセス回数は307(478)回、閲覧講義回数は762(188)回、閲覧講義数は119(91)であった。本学からの高知医療センターでのナーシングスキルコンテンツへのアクセス数は、25(0)であった。昨年度の本学からのアクセス数ゼロに対して、具体的なコンテンツの紹介等により、若干の実績数の増加がみられた。
※()内は令和5年度実績

(3)高知県立大学スキルズラボの利用実績

本年度の高知医療センターによる本学施設の利用実績として、高知医療センター・高知県立大学包括的連携事業「医療コンフリクトマネジメント研修会」が令和6年12月21日(土)に開催された。BLSOプロバイダーコースが本学から必要物品の貸し出しを行い、令和6年11月2日(土)に協同開催された。

(4)高知医療センター・高知県立大学スキルズラボ運営委員会

本学からの委員として、池田教授が参加している。本年度は令和6年10月17日(木)に第1回スキルズラボ運営委員会が開催された。令和6年度スキルズラボ備品等決算、令和6年度使用実績等報告、令和7年度スキルズラボ予算について話し合われた。運営委員会での議論は、高知医療センターとの包括的連携協議会において報告された。

(5)次年度の課題

本年度は昨年度に比べて、使用実績や活動実績がやや改善した。コロナ禍以前の活動に戻るまでには、様々な課題は残されているが、医療センター職員、学生(学部・大学院)や本学教職員の協働を推進し、効率的な包括連携の運営方法を再構築していく必要がある。

(6)スキルズラボ備品

本年度のスキルズラボの備品は昨年度と同様であるが、貸出実績はやや増加した。詳細は、健康長寿研究センター報告書を参照されたい。

3) 専門職者のキャリアサポート

(1)事業概要

本事業は、医療専門職者の臨床実践能力の向上や生涯発達の支援を目指して、高知医療センターとの包括的連携事業並びに高知県立大学健康長寿研究センターの専門職者のキャリアサポートとしての企画である。本年度は、初学者・学習者を育てていく指導者の看護実践応力を向上することに焦点を当てた「学習支援の極意を学ぶ！」学習会を開催した。

講師である愛媛大学医学部附属病院総合臨床研修センターの内藤知佐子氏より、初学者・学習者に見えているものと指導者が見ているものの違い・学習した内容が実践に結びつかないことなどの困りごとを共有しながら、改善を図るために必要となる「きく・みる・つたえる」方法を見出すことに焦点を当てた講義が展開された。さらに、講義で学んだ「学習支援の極意」を知識にとどめず実践に活用できるように、参加者を少人数のグループに分けて3つの架空事例を用いたグループディスカッションを行うといった講義と実践をつなぐ参加型の学習会を実施した。

(2)活動成果

講師から「学習支援の極意」として指導者は初学者や学習者がどのような背景をもち、どのような思考過程を特徴とするのか等を理解する必要性を既存の研究結果からエビデンスを示されるとともに、“教える（ティーチング）”から相手に応じて“引き出す（コーチング）”指導方法への転換が求められていることを具体的に学んだ。さらに、効果的な学習支援となるためには初学者・学習者と指導者との相互交流や相互理解を深めていくかわりが重要であり、指導者の“質問から発問へ”“具体的な発問のパターン”といった具体的な内容を学んだ。講義の後は実践への活用として、ひとつの事例（指導者と新人Nsのケアの振り返り場面）が示され、講師が講義で示した極意の活かし方を解説したうえで、3つの場面事例を1事例ごとに4～5人のグループディスカッションを通して、個人の学びにとどまらず、グループメンバー内外の学びの共有ができた。

(3)活動評価

参加者は学習会の中で、自身の指導者としてのあり様を振り返ったり、講義で学んだ「学習支援の極意」の内容を架空事例の展開において活用する実体験を行ったりすることができた。参加後のアンケート調査において、13名の参加者より回答を得た。その結果、学習会の内容が自身の学習ニーズにとても合っているかについて「とてもそう思う」「そう思う」（5段階評価の5）と13名全員の回答を得たことより、非常に満足感が高かった。また、学習会に参加して今後役立つ気づきや学びが得られたかについて「とてもそう思う」「そう思う」と12名より回答を得たことから、概ね学習支援に活かす気づきや学びが得られていた。さらに、得られた気づきや学びを今後の看護実践や看護教育に活かすことについては「とてもそう思う」「そう思う」と13名全員から回答を得たこと、また、自由記載においても明日から活用できるポイントや工夫を得たことや、講義の中での事例をグループディスカッションしたことでより実践の場をイメージして活用できるとの意見を得ることができた。

したがって、参加者個々人の立場において、初学者・学習者を育成していくにあたり、相手を理解する姿勢を礎に、指導者自身の思考を転換しながら看護専門職として高め合える学習支援の極意を日常の中で展開していく機会となったことより、本事業の達成ができたと考える。

4) 病院前妊産婦救護に関するシミュレーションコース Blso in 高知

(1) 事業概要

本事業は、高知県内の救急隊員や医師、看護師を対象とし、病院外や救急外来での急な分娩の対応、産科救急の初期対応を学ぶ研修である。高知県が平成29年度から高知医療センターに委託している事業であり、高知医療センターにて令和6年11月2日に開催された。受講者は救急救命士19名、医師2名、看護師1名、その他2名であった。看護学部教員（母性・助産看護学領域）はアシスタントとして運営サポートに携わった。研修プログラムは、分娩介助、新生児蘇生、女性傷病者の評価、症例検討、救急車内分娩などであり、講義と少人数グループによる実技トレーニングにより実践を学ぶ内容となっている（表1）。

		メイン会場(1階)	サブ会場(1階)
08:30～	受付開始	講師 8 時 00 分集合	
09:00-09:10	オープニング	渡邊	
09:10-10:10	分娩助 助 ABC:1 階メイン、DEF:1 階サブ 自己紹介 5 分 60 分(各セッション 20 分×3)	G1 分娩→肩甲難産→第 3 期 G2 肩甲難産→第 3 期→分娩 G3 第 3 期→分娩→肩甲難産	G4 分娩→肩甲難産→第 3 期 G5 肩甲難産→第 3 期→分娩 G6 第 3 期→分娩→肩甲難産
10:20-11:15	新生児蘇生 ABC:1 階メイン、DEF:1 階サブ 実習 50 分 最後に各グループでまとめ 5 分		
11:25-12:25	女性傷病者の評価 ABC:1 階メイン、DEF:1 階サブ 実習 50 分(シナリオ 5～6 個) 最後に各グループでまとめ 10 分		
12:25-13:00	休憩		実技試験会場準備(2 階)
13:00-13:40	症例検討 AB、CD:1 階メイン、EF:1 階サブ		
13:40-14:10	マタニティーケアの安全性(1 階メイン)		
14:20-15:10 車内分娩 15:10-15:30 4 本の柱	車内分娩(4 本の柱)/筆記・実技試験	車内分娩 ABC 筆記・実技試験 DEF	車内分娩/4 本の柱 (1 階メイン) 筆記・実技試験 2 階
15:40-16:30 車内分娩 16:30-16:50 4 本の柱	筆記・実技試験/車内分娩(4 本の柱)	筆記・実技試験 ABC 車内分娩 DEF	車内分娩/4 本の柱(1 階メイン) 筆記・実技試験 2 階
16:50-17:00	クロージング、写真撮影		DEF 講師は筆記試験添削 ABC 講師は写真撮影までに シミュレーター片付け

表 1. 研修プログラム

(2) 活動成果

高知県内の分娩施設の減少により、住居区域外で妊婦健診・分娩をする妊婦は多数いる。そのため、分娩施設までの物理的距離から、分娩施設がない地域の医療者は車中分娩、妊産婦救急に遭遇する機会が増えているといわれている。産科疾患の搬送や救急対応は全救急搬送においても少数の事例であり、救急救命士等においても、対応に不安を抱えている方も少なくない。周産期専門でない医療従事者がそのような場面での対応を学ぶことは、高知県内の妊産婦や胎児・新生児の救命に直結することであり、高知県民が受ける医療の質向上につながる。

(3) 活動評価

本学からは必要物品の貸し出しを行っており、病院前妊産婦救急に関わる人材の継続教育を支援することができた。受講生が、所属施設で伝達講習を行い知識の普及にもつながっている。アシスタントとして運営サポートに入った教員は、周産期医療に関する最新の知見や産科救急の他組織多職種連携の実践的な学びが得られるとともに、研修の企画・運営といった教育手法を学ぶ機会になった。次年度も開催される予定であり、引き続き、高知医療センター事務局、産科と連携して対応する。